

主 題：聖書の知恵を求めて⑥：柔和な者 or 怒る者

聖書箇所：箴言随所

この朝も続けて一緒に学んでいきたいのは、箴言のみことばです。特にきょうは、箴言が取り上げる一つの大きな問題について教えているさまざまな箇所を見ていきたいと思いますが、その前に、まずは皆さんに考えてほしい穴埋めクイズがあります。今から三つ、皆さんもよく知っている聖書のストーリーが描かれている箇所を読むので、空欄に当てはまることばを考えてみてください。一つ目はカインとアベルのストーリー。創世記4：3-5にこう書いています。「3 ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来たが、4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。主はアベルとそのささげ物とに目を留められた。5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく□□、顔を伏せた。」と。二つ目、サウル王様とダビデのストーリー。これはダビデがゴリヤテに勝利して凱旋した時の町の様子が、Iサムエル18：7-8にこのように記されています。「7 女たちは、笑いながら、くり返してこう歌った。「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。」8 サウルは、このことばを聞いて、非常に□□、不満に思ってしまった。「ダビデには万を当て、私には千を当てた。彼にないのは王位だけだ。」と。最後三つ目、ヘロデ王様のストーリー。ユダヤ人の王として生まれた幼子を見つけたら知らせてもらいたいと送り出した博士たちが勝手に国に帰ったことを知った後の様子が、マタイ2：16にこのように書かれていました。「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかったと、非常に□□、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。……」と。三つの空欄に入ることばがわかったでしょうか。それは「怒り」でした。登場した3名の人物が生きていた時代は違います。それを引き起こした原因もさまざまです。しかし彼らは、同じようにして「怒る」という反応をとっていました。

ここで、皆さんに改めて考えてほしいことがあります。それは、人が抱く「怒り」「憤り」というものが、どれほど深刻な問題を最初からもたらしてきたのかということです。よく考えてみてください。ほんの一例を見ただけでも、「怒り」は、ただ怒りでは留まらず、更なる悲惨な結末をもたらしていました。カインの怒りは、人類最初の殺人を引き起こすことに繋がり、サウルの怒りは、初めは愛していたダビデのいのちを狙うことになり、ヘロデ王の怒りは、イエス様に対する激しい殺意を覚えるだけでなく、実際に多くの幼子のいのちを奪うことに繋がりました。人の抱く「怒り」「憤り」は、最初から大きな痛みや罪を生み出し、家族や兄弟、愛情があるはずの関係を壊してきたわけです。そして残念なことは、この問題が今はもう終わったものではないということです。私たちもよく知っているとおりに、これは今を生きている私たちひとりひとりの生活においても、変わらずに存在し続けています。

ロバート・ジョーンズというひとりの先生は、私たちの怒りについて、次のようなことばを残していました。「怒りは普遍的な問題であり、あらゆる文化に存在し、あらゆる世代が経験してきました。誰もこの存在から切り離されることはなく、その毒から免れることもありません。怒りは一人一人に浸透し、最も親しい人間関係さえ台無しにします。怒りは、墮落した人間の本質に深く刻み込まれているのです。悲しいことに、このことはクリスチャンの家庭や教会においても当てはまります。」と。また、ジェリー・ブリッジズという先生も、この点に関して、このようなことばを口にしていました。「私たちの怒りはしばしば、本来最も愛すべき相手——夫や妻、子どもや両親、兄弟といった肉の家族、またキリストにある兄弟姉妹といった教会の家族——に向けられてしまうのです。」と。

立ち止まって、少し考えてみてください。自分のこれまでの歩み、いや、先週の歩みを振り返った時、いったいどれほど、心のうちに「怒り」を覚えたでしょう。「怒り」の現れ方はいろいろです。「怒り」

ということばを聞くと、すぐに頭に浮かべるような、感情の爆発、ことばや態度などの外側に表れる憤りもあれば、まるで何の問題もないかのようにふるまっているながら、実際はふつふつと、心の中で不満や苦い思いが燃えているような内側の憤りもあります。それがどのような怒りであっても同じです。怒りを抱いた結果、いや、今もずっと抱き続けた結果、関係がこじれたり、関係が壊れたままでいるようなことがなかったでしょうか。言うまでもなく、私たちはよく知っています。この「怒り」の問題は、大きな痛みと損失をもたらす危険なものだということです。

○聖書の知恵を追い求めて：怒りに関する三つの事実

では、このような危険な問題、私たちのうちに蔓延っている、普遍的で困難な問題に対して、私たちはどうすれば正しく向き合うことができるのでしょうか。どうすれば、この「怒り」の問題に対して、私たちは神様に喜ばれる生き方をしていくことができるのでしょうか。感謝なこと、みことばは、この点に関してもひとりひとりに大切で必要な知恵を教えてください。特にきょう、見ていく箴言には「怒り」に関する三つの事実が挙げられていました。一つずつ順番に考えてみましょう。これが皆さんの助けになることを心から祈っています。

1. 怒りは愚か者を特徴付けるもの（箴言 12 : 16、27 : 3-4、29 : 11）

怒りに関する一つ目の事実は、怒りは、愚か者を特徴付けるものだということです。箴言は繰り返し、怒りを表す者と愚かさを結びつけていました。

箴言 12 : 16、27 : 3-4、29 : 11

「12:16 愚か者は自分の①怒りをすぐ現す。利口な者ははずかしめを受けても黙っている。」

「27:3 石は重く、砂も重い。しかし愚か者の①怒りはそのどちらよりも重い。:4 ②憤りは残忍で、③怒りはあふれ出る。しかし、ねたみの前にはだれが立ちはだかることができよう。」

「29:11 愚かな者は④怒りをぶちまける。しかし知恵のある者はそれを内におさめる。」

愚か者とは、どのような存在のことを言うのでしょうか。愚か者とは、自分の怒りを即座に表す者のことでした。自分自身が正しく憤りを制するのではありません。その逆で、憤りに心が支配され、憤りによって振り回され、憤りをすぐにぶちまけて腹を立てるような者、それを箴言は愚か者だと言うわけです。ただ、これだけを聞くと、自分はこれには当てはまらないと思うかもしれません。「昔は、すぐにカッとなってしまうこともあるけれど、今はもう落ち着いて、そのようなことはない」と心の中でつぶやいているかもしれません。ここで鍵になるのが、箴言で使われていた「怒り」ということばです。今私たちは箴言から3か所を見ました。この中で「怒り」「憤り」ということばが何度か出てきました。日本語の聖書ではなかなか読み取れないのですが、この3か所で、「怒り」や「憤り」ということばには、もともとの言語であるヘブル語で、四つの別々のことばが使われていました。この四つのことばをきちんと理解すれば、聖書が言わんとしている「怒る人」がどのような人なのか思い浮かべることができます。

① 「怒り」（ヘブル語：カアス）

12 : 16と27 : 3に出てきていた「怒り」は、“カアス”というヘブル語が使われ、「いらだつ」、「むっとする」といった内面的な感情の怒りを表すことばが使われていました。何か起こった出来事に対して、自分自身の心がイライラしている状態、熱くなっている状態を指しています。外に出さなくても、心のうちがいらだっている状態、それがこの“カアス”ということばでした。

② 「憤り」（ヘブル語：ヘマ）

27 : 4に出てきていた「憤り」には、“ヘマ”というヘブル語が使われ、もともと「毒」という意味が含まれていました。また、これに加えて、「激怒」や「憤怒」といった燃えるような激しい怒りを表す意味がありました。心のうちに毒を秘め続けている人はどうなるでしょう。その人は、瞬間的に怒りはしません。しかし、その毒がどんどん浸透していくように、徐々に苦い思いや憎しみが心の中で増大していき、ある瞬間になると、それが大爆発するわけです。「憤り」は、そのような根深い激しい怒りを指して

いました。

③ 「怒り」 (ヘブル語：アフ)

27 : 4の後半に出てきた「怒り」には、「アフ」というヘブル語が使われ、もともと「鼻」や「鼻の穴」を表す意味が含まれていました。この意味から、顔を赤らめて鼻息を荒くして怒っている様子を描くのに使われたりしたわけです。私たちが怒っている人を想像する時に、最も思い浮かべるような姿かもしれませぬ。理性を失い、制御不能になっているから、怒りがことばや行動になって表れたりするわけです。まさに、サウル王様が自分の息子ヨナタンに対して、槍を投げる直前に用いられていたのも、このことばでした。Iサムエル20 : 30に「サウルはヨナタンに怒りを燃やして言った。「この邪悪な気まぐれ女の息子め。おまえがエッサイの子に肩入れし、自分を辱め、母親の裸の恥をさらしているのを、この私が知らないとも思っているのか。」(2017年度版訳)と。サウル王様は鼻息を荒くして、顔を赤らめて怒っていました。その怒りが、暴力的な行動として出てきていたわけです。

④ 「怒り」 (ヘブル語：ルアハ)

29 : 11に出てきていた「怒り」には、「ルアハ」というヘブル語が使われ、「気の短さ」や「せっかちさ」といった感情の怒りを表す意味が含まれていました。

まとめて考えてみてください。四つのことばの意味を掛け合わせて考えれば、箴言が描いている「怒り」の姿が見て取れるわけですが、いったいそれはどのような姿でしょう。いわゆる、感情を爆発させて怒る人のことだけを指しているのではないということです。箴言が教えている「怒り」というものは、私たちが外側に出さない心のいらだち、根深い憤り、冷たさ、苦い思いも含まれていますし、実際に外側に出てくる怒り、短気さ、理性を失った応答や返事、中傷、暴言、暴力さえも、すべて含まれているということです。

私たちは普段の生活の中で、心を騒がせるような場面に直面することが多々あります。自分と全く同じ罪人と、時間をともに過ごしていれば、その人とすれ違うこともあります。自分の伴侶から受けることば、子どもがとる態度、仕事場や教会でなされている会話なども含めて、いろいろな思いを抱かせる瞬間があります。そのような場面で、私たちは、どのような応答をしているのでしょうか。自分の心を制しているのでしょうか。それとも、何か問題が起こるたびに、自分の怒りを表しているのでしょうか。何か言われるたびに、イライラして、批判や不満をすぐに口にしていたり、実際に何も言わなかったとしても、心のうちに冷たい敵意を秘めて、相手との距離をとろうとするのでしょうか。もし、そのような怒りに、すぐに自分自身を支配させ、すぐに怒りをぶちまけているのだとすれば、箴言は、そのような者のことを「愚か者」と表していたわけです。非常に厳しいことが言われました。

2. 怒りは自分自身や相手を傷つけるもの (箴言14 : 29-30、15 : 18、29 : 22)

ではなぜ怒りに心が支配され、怒りに振り回されることが、愚か者の特徴になるのでしょうか。その点に関しても、箴言ははっきりと教えてくれていました。それが二つ目です。二つ目の事実、怒りは自分自身や相手を傷つけるものだというわけです。

まず、怒りが自分の身にもたらす影響について、箴言はこのように述べていました。14 : 29-30に「:29 怒りをおそくする者は英知を増し、気の短い者は愚かさを増す。:30 穏やかな心は、からだのいのち。激しい思いは骨をむしばむ。」と。ここで言われた「骨」とは、文字どおりの骨を指しているわけではありません。これは、その人自身、また、その人のからだの健康を表すことばでした。つまり、私たちが激しい思い、怒りや妬みを心に持ち続けているのであれば、私たちの健康、からだにも影響を及ぼす可能性や危険性があるのだと言うわけです。これは確かな事実です。

実際にネットで調べてみると、このような研究結果がありました。ある研究チームが、健康な成人280人を対象に、負の感情が血管機能にどのような影響を与えるのかを調査しました。集められた280人は、四つのグループに分けられました。怒りの記憶を思い出すグループ、不安の記憶を思い出すグルー

プ、悲しみの記憶を思い出すグループ、ただ1から100まで数字を数えるグループの四つに分けられ、それぞれがその行為を行う前後の血圧や血管機能が測定されました。その結果、怒りの記憶を思い出したグループだけが、その後40分間、血管機能が通常状態ほど拡張されないことが発見されました。この研究を率いたひとりの教授も、このようなことばを残しています。「この研究が示しているのは、怒りは無害ではないということです。怒りを持つ人々を助けるためには、認知行動療法であれ、ほかのアプローチであれ、何かしらの方法を講じるべきだと私たちはみな理解しています。と言うのも、率直に言って、怒りは健康に良くないからです。」と。この世の研究もそのように言っていました。もちろんこのような研究に頼らなかったとしても、私たちは自分自身の経験をもって、よく知っています。私たちも、いつまでも自分の心のうちに、苦い思いや憤りを持ち続けているのであれば、それは次第に私たちのうちから喜びや平安を奪っていき、心はどんどん重たくなっていくわけです。激しい怒りは、確かに、私たち自身の骨をむしばむ危険なものでした。

しかし、それだけではありません。怒りは自分自身を傷つけるだけでなく、まわりの人さえも深く傷つけるものでした。この点に関して、箴言は繰り返し述べています。15：18には「激しやすい者は争いを引き起こし、怒りをおそくする者はいさかいを静める。」と。少し進んで29：22は「怒る者は争いを引き起こし、憤る者は多くのそむきの罪を犯す。」と。怒りがもたらす一つの避けられない結果は何でしょう。それは争いでした。怒りや憤りが存在していれば、その怒りが関係を壊すわけです。この事実は、どの時代においても変わっていません。たとえば、きょう最初に見たカインとアベル。兄弟の間を引き裂いたのは、弟に対する兄の怒りや憎しみでした。また、エサウとヤコブはどうでしょう。自分が受けるはずだった祝福を、弟ヤコブに奪われた兄エサウは、激しい憎しみを抱き、殺意を燃やしていました。創世記27：41にこのように書かれています。「エサウは、父がヤコブを祝福したあの祝福のことでヤコブを恨んだ。それでエサウは心の中で言った。「父の喪の日も近づいている。そのとき、弟ヤコブを殺してやろう。」」と。エサウは、一歩立ち止まって弟がしたことを考え、弟を赦すという選択を取ることはできました。しかし、彼の心に抱いた怒りや憎しみは、兄弟の間を、いや、それ以上に家族の間を引き裂くことに繋がったわけです。

怒りには、確かにあらゆる関係を壊すほどの力が備わっていました。デービッド・ポーリソンという先生も、怒りの持つ影響力に関して、このようなことばを残しています。「現実の生活において、怒りは結婚を焼き尽くし、家庭を崩壊させる反応です。怒りはゴシップをあおり、クラスメイトに危害を及ぼします。教会を分裂させ、友情を敵意に変え、道路上で激しい怒りとして爆発します。あらゆる不満や恨みの根底にあるのが、この怒りなのです。」と。まさにこのことばどおり、私たちも経験したことがあると思います。怒りにあふれたことばは、それを聞く者に悲しみをもたらします。怒りに満ちた返事は、それを聞く者の喜びを奪います。激しい怒りに満ちている態度は、まわりの者に恐れを生み出し、冷たい怒りに満ちている態度は、まわりの者との距離を生み出します。忘れてはいけないことがあります。もし、私たちがすぐに怒りを示すのであれば、私たちは自分自身や相手を傷つける危険な兵器を自分のうちに持っているということです。もし、私たちが自分自身の心を守らずに、容易に憤りに心を支配させることを許しているのであれば、私たちは、夫婦関係や親子関係、友人関係や兄弟姉妹との関係を吹き飛ばしてしまうような兵器を振り回しているということです。怒りは、小さな問題ではありません。関係を崩壊させる危険なものでした。そのような危険な兵器を平気で振り回しているような人のことを、箴言は「愚か者」と呼ぶわけです。

3. 怒りは、慎重に扱われるべきもの（箴言14：29、16：32、19：11）

そして最後三つ目の事実は、怒りは、慎重に扱われるべきものだという事です。これまで「怒り」について見てきましたが、少し考えてみてください。「怒り」は、どのようなものであったとしても悪なのでしょうか。どのような「怒り」であったとしても、自動的にすべて罪深いものなののでしょうか。答えは、

そうではありません。みことばは、すべての「怒り」が間違っているとは教えていません。むしろ、私たちの愛している神様こそ「怒りの神様」として、聖書の中に何度も描かれていました。

たとえば、詩篇7：11-13でこのように言われています。「11 神は正しい審判者、日々、怒る神。12 悔い改めない者には剣をとぎ、弓を張って、ねらいを定め、13 その者に向かって、死の武器を構え、矢を燃える矢とされる。」と。私たちの神様は「日々、怒る神」なのだとされていました。また、モーセがシナイ山で、神様に栄光を見せてくださいと願った時、あわれみ深い神様は、それを示す代わりに、ご自分の偉大なご性質を明らかにされました。いったい神様は、どのようなご性質をご自身で明らかにされたのでしょうか。そのことが出エジプト34：6に記されています。「主は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、」と。神様とはどのようなお方なのでしょう。神様こそ「怒りの神様」でした。ある人たちが誤って考えるように、愛である神様のうちには、怒りというものが存在しないではありません。このお方は愛であるからこそ怒りを持っておられます。愛であるのと同時に義であり、聖さを心から愛されるお方であるからこそ、その反対の悪というものを、そのままにされることは絶対にありません。もし仮に、悪や罪が存在しているにもかかわらず、それを有耶無耶にされるのであれば、神様は神様ではありません。このお方は正しさを愛し、喜ばれるお方であるからこそ、ご自分に逆らう世にある罪に対しては、それがどんな罪であったとしても正しい怒りを示されるわけです。これがいわゆる「義なる怒り」とか「聖なる怒り」と呼ばれたりするすばらしいものでした。聖書は、そのような怒りが存在していると教えているわけです。神様の持つておられる「怒り」は、正しい怒りでした。義なる怒りでした。そして、私たちがこの聖い神様を愛して、この方にならって聖い者として、この方のご性質を現す者として成長していこうとするのであれば、私たちが汚れた罪や悪を見るときに、それに対して私たちも正しい怒りを表す者として歩んでいく必要がありました。私たちも悪があるのに、ほったらかしにして何も知りませんとするのではなく、私たち自身もその正しい、義なる怒りを示す必要があるのです。怒りはすべてが悪なのではありません。私たち自身の歩みのうちにも正しい怒りは存在しているわけです。

ただし、これは慎重に扱わなければいけません。と言うのも、多くの人たちが、この「義なる怒り」というものを盾にして、自分の間違っている怒りを正当化しているからです。ある人は特定の状況にあれば、自分には当然、怒りを表す権利があるとさえ感じていたりします。またある人たちは、実際にこのようなことを口にすることがあります。「イエス様だって怒りを覚えていたではないですか」、「私もイエス様にならって、ただ怒っているだけです」と。私たちは正しく覚えていなければいけません。「義なる怒り」「正しい怒り」というものを示すためには、それが何なのかを、正しく理解する必要があるわけです。聖書が求めている「正しい怒り」というものと、聖書がノーと言っている「間違った怒り」「罪深い怒り」は、どこにその違いがあるのでしょうか。何が違っているのでしょうか。これを理解する上で、最初にも引用したロバート・ジョーンズ先生が、三つの「義なる怒りの特徴」を挙げてくれていました。とても助けになる内容なので、一緒に考えてみましょう。

●義なる怒りの特徴

1) 義なる怒りは実際の罪に対して反応する

一つ目に挙げられていた特徴は、義なる怒りは、実際の罪に対して反応するということです。言い換えると、「義なる怒り」「正しい怒り」というのは、聖書を通して明らかにされている罪、神様のことばに従わないこと、それに対する怒りでした。間違っても、何か自分にとって不都合なことがあったからとか、自分の好みや基準、考えを害されたからなどの理由で抱くものではないということです。義なる正しい怒りは、常に神様のことばに照らし合わされたものでなければならないというわけです。ことばだけ聞いていてもよくわからないかもしれませんが、聖書は具体的な例をもって教えてくれます。たとえば、神の御子として地上に来られたイエス様は、この義なる怒りを何度か示されていました。その一つに、商

売の場と化した神殿にあって、そこにいた商人たちをイエス様は怒りをもって追い出していたわけです。その時、イエス様は何と言って追い出していたかということ、マタイ21:13にこのように書かれています。「そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。』」と。イエス様は、どのようにして怒っていたでしょう。イエス様は、個人的な気分や感情を害されたから怒っていたのではありません。イエス様は書かれていることに、人々が逆らい、人々が実際に罪を犯している様子を見たから怒りを表していたということです。正しい怒りというものは、必ずそこにみことばと照らし合わせたものがありました。イエス様はそのように歩んでいたわけです。義なる怒りは、実際の罪に対して反応するのだということです。

2) 義なる怒りは自分自身や自分の王国・権利・関心ではなく、神様と神様の王国・権利・関心に焦点を当てる

二つ目に挙げられていた特徴は、義なる怒りは、自分自身や自分の王国・権利・関心ではなく、神様と神様の王国・権利・関心に焦点を当てるということです。言い換えると、正しい怒りというのは、自己中心的な動機からなされるものではないということです。義なる怒りは、自己中心的なものではなく、神様を中心とした動機から生じる怒りでした。つまり、自分の評判や自分の持っていた権利が奪われたから、自分の気分や感情が害されたから、自分の思いどおりにいかないから、自分が気に入らないからなどの理由で抱くものではないということです。自分が、自分が、自分がではありません。神様の御名と栄光が傷つけられた時、その時に抱く怒り、それが「義なる怒り」「正しい怒り」というものでした。これも同じくイエス様の姿のうちに見て取ることができます。神殿で怒りを抱かれた時、イエス様は何に対して怒っていたのでしょうか。ヨハネ2:16ではこのように言われていました。「また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」と。イエス様は自分自身のことで怒りを覚えていたのではなく、「わたしの父の家を」と、自分が愛している父なる神様の家が汚されていたから怒りを露わにされていたのです。自分中心な怒りではありません。神様の御名が、神様の栄光が、神様のみことばが汚されているその時に抱くものが、正しい怒りというものでした。

3) 義なる怒りは他の霊的な品性を伴い、神様に相応しい形で表される

三つ目に挙げられていた特徴は、義なる怒りは、ほかの霊的な品性を伴い、神様にふさわしい形で表されるということです。言い換えれば、義なる怒りは、自制を保ったままの怒りだということです。気分任せに感情の赴くままに悪いことばを吐いたり、感情に振り回されて取り乱してしまったり、仕返しのおもってだれかを冷たくあしらったり、報復するために無視したりするようなものではないということです。義なる怒りは、愛や柔和さや忍耐や自制を同時に伴ったものでなくてはならないということです。怒っているその時、愛を示さないという言い訳はないということです。また、柔和さや忍耐を示さないという言い訳はないということです。正しい義なる怒りというのは、怒っているその時でさえ、愛や忍耐や柔和さや自制が、同時に伴うものでした。箴言もこのようなことばを繰り返しています。14:29は「怒りをおそくする者は英知を増し、気の短い者は愚かさを増す。」と。少し進んで16:32は「怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさる。」と。さらに進んで19:11では「人に思慮があれば、怒りをおそくする。その人の光栄は、そむきを赦すことである。」と。これらの箇所では「怒りをおそくする」という同じことばが繰り返されていました。興味深いことは、この「怒りをおそくする」ということばは、箴言以外の旧約聖書で使われていれば、常に神様のご性質を現すのに用いられるものでした。先ほど見た、出エジプト記のところでも、モーセの前に現された神様のご性質は「怒りをおそくする」ものだったわけです。それに対して、箴言の中でこのことばが使われれば、このことばは常に知恵のある人に対して使われていたということです。つまり、主を恐れる知恵のある人というのは、愛や忍耐を伴う、怒りをおそくする主の姿を現すことになるということです。私たちが正しい怒りを持って、怒りをおそくする者として歩いていくなれば、私たちは主の姿を現すことになるのです。ひとりの注解

者もこのようなことばを残していました。「忍耐のある人は、不当な仕打ちを受けても動じず、感情を制して敬虔さと倫理に従って考え、行動します。挑発されても心を乱さず、報復しようと過剰に反応したりせず、主に信頼するのです。この人は神に似ています。」と。

さて、私たち自身、日々の生活の中で、自分の怒りを正当化したくなるような場面は数多くあるでしょう。ある時は家の中で傷つけられるかもしれません。自分の伴侶や親が、心を騒がせるようなことばを自分に投げかけたら、どのように応答するでしょう。自分の子どもが尊敬に欠いたような態度をとったら、どのように応答するでしょう。すぐに怒りを表して、すぐに激怒して、ふさわしくないことばをもって応戦しようとするのでしょうか。自分が気分を害されていることを相手にわからせようと、そっけない態度をとったり、避けようとするのでしょうか。その場面が終わった後でも、いつまでもその場面を心に思い巡らせ、苦い思いを持ち続けるのでしょうか。家族だけではありません。もし、友人や兄弟姉妹、職場の人や近所の人、自分を深く悲しませるようなふるまいをとったら、どのように応答するでしょう。相手が先にしたから、自分には思いのままに怒りを表す正当な理由があると、心を感情に支配させることをよしとするのでしょうか。

私たちは、義なる怒り、正しい怒りを表す者として、怒りをおそくする者として成長していかなければいけません。自分が義なる怒りを示しているのか、それとも、間違った罪深い怒りを示しているのか、私たちはそれを自分自身に問うことを通して知ることができます。どのように問うのか——。今自分は自分に対してなされたことで怒っているのか、それとも神様に対してなされたことに怒っているのか。また、今の憤りは、自分個人の考えや思い、感情やプライドが傷つけられたから怒っているのか、それとも神様のことばや神様が傷つけられ、神様のことばに反する行為がなされたから怒っているのか、どちらなのかと問い続けることです。

そして、覚えておかなければいけないことは、義なる怒り、正しい怒りは、どんな時もみことばや神様に対して犯した罪に対して生じるものであって、個人の傷や復讐心から生まれるものではないということです。もし、私たちの焦点が神様でなく、自分になっているのであれば、その怒りは神様の前に見た時に、愚かで正しくないものだと、聖書ははっきりと言うわけです。主を恐れている知恵のある者は、怒りや憤りがもたらす危険性をよくわかっています。いかに危険で、自分自身にとって害があるだけでなく、ほかの人にとっても害であることを知っているからこそ、その怒りをそのまま置いておこうとするのではなく、神様の前に心から悔い改めて、弱く愚かな自分を導いてくれる神様にただ信頼して、神様の姿に心を留めて、失敗しても、神様のように怒りをおそくする者として、正しい怒りを持って歩む者として成長して歩んでいこうとするわけです。私たちにとって、この「怒り」の問題に向き合うことは容易なことではないでしょう。気づいていないかもしれませんが、私たちはみな、「怒り」の問題を持っています。ですから、私たちの肉にとって最も自然な応答は、悪に対しては悪でもって報いることです。だれかから傷つけられれば、私たちの最初に出てくる応答は、その相手を傷つけ返すことです。自分の気分が害されたら、私たちの最も自然な応答は、その相手にその事実を知らしめて、困らせ苦しめることです。素直になれば、私たちはみな、この「怒り」という問題を抱えています。この「怒り」という問題にまみれていて、罪深い者だということです。どこまでも愚かだということです。

では、どうすれば成長できるでしょう。どこに希望があるのでしょうか。それは私たちがいつも主の愛と主の模範を覚え続けることです。そこから目を離さないことです。改めて考えてみてください。救い主としてこの世に来てくださった御子イエス様は、どのような人生を歩まれたでしょう。イエス様はその歩みの初めから、数えきれないほどの攻撃を受けました。人々から何度も試され、何度も辱められました。イエス様は病人をいやし、福音を伝え、悪霊を追い出すようなすばらしい働きをなしました。しかし、それをねたんだ敵たちから悪霊のかしらベルゼブルの力によるものだと、ありえない悪口を浴びせられることもありました。敵だけではありません。自分が愛していた弟子たちにも、何度も悲しませられること

がありました。挙句、最後にはひとりの弟子から裏切られ、また、別のひとりからは三度も知らないと言明もされました。また、イエス様はいっさいの過ちも犯してもいないのに、捕らえられ鞭打たれ、裁判の席にかけられ、つばをかけられ、最後には十字架につけられて苦しみ死ぬことになりました。自分自身が受けた理不尽さに対して、自分自身が持っている立場や権利を主張して、怒りを示すことができる方がいたとすれば、この方こそまさにその権利がありました。私たちとは違い、イエス様のうちには文字どおり何の罪もなかったわけです。

しかし、イエス様は、ご自分のことに関して怒りを燃やすことはありませんでした。神様の御名が汚されている時、父なる神様のことがゆがめられている時は、怒りを燃やしました。しかし、自分自身がどれだけ傷つけられても、どれほど悲しみを味わっても、自分の手で仕返しすることはなされませんでした。その力がなかったからではなく、最後に正しくさばかれるお方に、すべてを信頼してゆだねていたわけです。そんなイエス様の姿が I ペテロ 2 : 21-24 に記されています。「:21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と。怒りにまみれて罪ばかりを犯しているような私たち罪人のために、イエス様はいったい何を成し遂げてくださいましたか。本来であれば、さばくことのできるさばき主が、へりくだって自ら十字架にかかり、ご自分のいのちを捨ててくださったからこそ、この方を信じる私たちは罪赦され、義のために生きていくことができる者へと変えられました。本来であれば、怒る権利を持っておられる唯一のお方が、愛を示すことを選び、仕えることを選ばれたからこそ、怒る者である私たちは、怒りから解放され、柔和さと自制をもって歩むことができる者へと変えられました。

確かに、きょう見てきたように、怒りは私たちの骨をむしばむものです。怒りは、私たちの間にある関係を壊すものです。イエス様を知る前は、怒りに対してどうする術もありませんでした。どこにも希望がなかったわけです。しかし、イエス様が私たちが受けるべき神の怒りを代わりに受けて、怒れる罪深い私たちを、あの十字架にあって赦してくださったからこそ、この方とともに歩むその時に、私たちは自分たちが持っている怒りの問題も、主にあって変えられることができるのだと、希望を持って生きていくことができるのです。私たちに力があるから、この怒りの問題が解決できるわけではありません。私たちを救うのに測り知れない力を持ったお方が、ともにいてくださるからこそ、私たちは変わっていくことができます。だとすれば、怒りを覚えそうになる時、すぐに怒りを示したくなるその時、この主の愛を思い出し続けることです。この方がどのようにして怒りを耐え忍ばれたのか、忍耐を示されたのか、柔和を示されたのか、自制を示されたのか、その模範にならって、この主を愛する者として、何より主の栄光を現す者として、今週もともに生きていきましょう。